## *アンボセリ国立公園*

アンボセリ国立公園まで、ジープで 4 時間くらいかかる。ナイロビを出ると車窓から見る風景は殆ど変わらない。所々に灌木が見える草原といいたいが、荒地が果てしなく続いている状況である。

ナイロビから真っ直ぐ南下して、隣国タンザニアとの国境の町ナマンガに到着して休憩をとる。ケニアの道路にはパーキングを目的としたエリアはない。道路沿いにあるドライバーや観光客の食堂やみやげ物売り場が駐車場になる。ここでトイレを済ませてアフリカンアートな木彫り人形や織物を見る。

外回りを見るとここは木造の小奇麗な住宅が並ぶ小さな町である。もちろん高い建造物などなく、住宅の屋根のむこうにキリマンジャロらしい高い山の頂が見えた。

まずはカメラでその雄姿を撮っておく。かなりの遠方なので望遠レンズで撮っても小さくしか写らないだろうと思いながら、とりあえず見えているのだからカメラに収めておいた。ヒマラヤでもカラコルムに行ったときにも経験したが、高山はいつ天候がくずれて見えなくなるかわからない。見えたときに撮っておかないともう少し近くに行ってからと躊躇したために撮り損じてしまうことが結構多い。

（写真 58 左）はるかに望むキリマンジャロの峰。かなりの望遠で撮っている。

国境の町によくある風景は貨物を積んで国境を越えるトラックが出入国の手続きに並んで待っている姿である。ここにも 2,30 台くらい、道路だけでなく広場に駐車している。

（写真 59 右）国境近くは車で混雑している。出入国の手続きに時間がかかるようだ。

（写真 60 左）国境近くのレストラン。審査待ちのドライバーで賑っていた。

順番待ちの運転手がその周りの屋台で食事をしながら休息をとっていた。さすがに国境の町である。ここまで、途中では車も人もまばらだったが、ここでは出る人、入った人と車の休憩場所として、店も多いし、人も多い。

（写真 61,62）道路上で見た風景。上はスナック売り場。左は電話ボックス。

その雑踏を通過して南西方向に道を変えて、またしばらくドライブする。

この町からアンボセリに近づくにつれて、木々が多くなっていく。葉がそれほどついていない樹の枝には大きな鈴のような小鳥の巣がすずなりについている。
残念ながら、鳥の姿は日中なので、見えない。トゲの多い枝先にあるのは蛇や動物から守る為であろう。

（写真 63）小鳥の巣。一本の木に数十個は鈴なりに付いている。

キリンが居るのが見えてくる。100mくらい先に 3 頭いて、盛んに首を伸ばして木の葉を食べていた。
周囲の樹に葉が少ないのはキリンに食べられたあとかもしれない。
ようやく空港で見たキリンでなく、自然な姿のキリンを見ることが出来た。

（写真 64）野生のキリン。ブッシュに隠れているので、見つけるのは難しい。

しかし、ここから先キリンを見る機会はなかった。
他にも動物が居るのかもしれないが、我々にはなかなか見つけられない。

やがて、ゲートがあってアンボセリ国立公園に入る。ゲートの周囲にはみやげ物を売っている小屋が数軒

あるだけで、境界を隔てる柵はない。入園の手続きをして、園内をしばらく走って、とりあえず宿泊するホテルにチェックインする。面積 390 平方メートル強の広さのこの公園はなんといってもキリマンジャロが目の前に見えることで有名である。火山灰地で土壌は白い。裾野に広がる草原は見渡す限り広大で、その所々に林がある。その林の一つに宿泊するホテル「アンボセリ・セレナロッジ」がある。完全に林に隠れているのでランドスケープでは見えないようになっている。

中央にフロントと食堂のある木造の建物があり、そこで鍵を受け取って自分の部屋までは林の中を歩いていくことになっている。平屋の 10 軒長屋が散在してあるので、運が悪いとかなり食堂から離れてしまう。このロッジは木々に隠れて外からは見えないし、ここだけは野生動物が入らないように簡単な木の柵で囲まれている。
部屋はビジネスホテルくらいの広さしかない。洗面は出来るが冷蔵庫やテレビはもちろん無い。エヤコンもない。天井に大きなファンが着いているだけである。蚊や虫が入ってくるから窓も小さく閉めっぱなしである。私も同室の山本さんも熱帯の経験を持っているから、これくらいのことでは驚かない。まずは室内に入ると蚊取り線香をいぶして虫除けをする。そして小動物や虫が紛れ込んでいないか室内を点検する。ボルネオでもホテルだけでなく簡単な作りのロッジに泊まることもあるので、室内の点検は習慣になっている。着替えをするときも点検を怠らない。もし毒虫でももぐりこんでいると、大変なことになるからだ。

ロッジは椰子の木や南国の植物があって、我々にとっては異国ムードたっぷりである。部屋から出ると、マサイの若者がいた。あとでダンカンから聞いたが、このロッジに雇われているらしい。仕事は敷地内に小動物が紛れ込んでいないかの監視で、絶えず巡回している。特にサルは、日本のサルと同じで、観光客にいたずらをするので、それをゴムパチンコで小石を飛ばして追い払っているのがメインの仕事だそうだ。

マサイ族の男は必ずゴム製のパチンコを持っていて、ふところに小石を蓄えている。放牧の時に周囲に牛が怖がる動物が近くにくると、それを使って脅すのだそうだ。
けっして、相手に当てることはない。相手を怒らせては逆効果になりかねない。追い払えばそれで良い。その辺の呼吸をマサイの男は動物毎に会得しているらしい。

マサイ族というと近寄りがたい印象がある。ダンカンからはドライブ中にマサイ族の写真を撮ると怒って、パチンコで石をぶつけられますよと何度も注意されている。しかし、巡回しているマサイの若者に「ジャンボ」と声をかけると、ニッコリと白い歯を見せて「ジャンボ」と答えてくる。結構人懐こく我々を食堂ホールに案内でもするようについてくる。

ロッジについて間もなく、夕食前のゲームドライブに行く。
ここでのゲームドライブもダンカンの車である。ケニアに来てから同じ車なので、気心も解ってきている。
ホテルの敷地から出るときに、「注意事項があります」とダンカンが説明しだすと、皆が口を揃えて、「トイレには行きました」と答える。
「ここは広いので、前回より一層早めに教えてください」とダンカンが続ける。

（写真 65）キリマンジャロの裾野に広がるサバンナ。キリマンジャロの向こうはタンザニアでやはり野生動物保護区になっている。（夕方）

真正面にキリマンジャロを目にしながら、その裾野を進んで行く。恐ろしく広大である。キリマンジャロの裾野をすべて一つの視野には納められない。周囲を眺め回しても建造物はない。すべてが草原で所々に小さな林がある。宿泊したようなロッジが公園内に何箇所かあるらしい。皆林の中に有るので見えないが、既に我々より先にゲームドライブをしているグループがいた。

（写真 66）所々に高い木もある。中央の木の上に大きな鳥がいるのがわかりますか。

公園内は許可された専用のジープでないと入れない。2，30 台位の車が散らばって動いている。道路はもちろん舗装されていない。土をもった凸凹道で所々に水溜りがある。専用道路以外は石ころが多くて、ジープでも走れそうにない。道は縦横無尽についているわけではないので、車が広い草原に点在している状態だ。いつしか仲間の車も散っていき、自分の乗車した車の周りには一台もいなくなる。しかし、それにはある意味があった。

（写真 67,68）ガゼル等の鹿の仲間は警戒心が強い。必ず見張りを立てている。必要以上に敵が近づくと一斉に走りさる。（夕方）

ガゼル、ヌー、シマウマが直ぐ傍に群れをなして草を食べている。集団でいる動物は群れでいるので、遠くからでもわかるし、近くに行っていくらでも観察出来る。
車のすぐ傍にいても逃げることなく、もくもくとで草を食べているからだ。

（写真 69）ヌウの群れ（早朝）

（写真 70）シマウマの群れ（朝方）

ガイドのダンカンがトランシーバーで盛んに交信している。散らばって行動している仲間と情報交換して、道路の近くで見られる動物を探しているらしい。
「あちらにアフリカ象がいるらしいよ」と後戻りして、三叉路を別な方向に走らせる。先に挙げた様な群れで行動している動物の数は多い。どこにでもいるが単独行動をする動物や数が少ない動物となると、なかなか見つけるのが難しい。車道の近くに居るとは限らない。それをお互いに情報交換しながら、それぞれの場所に急行する。
動物は毎日同じ行動をとるといっても、たえず移動しているから不確実である。情報交換することで、我々が見られるヒット率を上げているのだ。

（写真 72）小象は家族に守られている

（写真 71 左）アフリカ象の群れ

（写真 73）群れから離れて全体を見ている一族を率いるボスの雄象、大きく迫力満点である。寄生虫よけの泥あびをしているので、下半身が濡れている。

我々が偶然見つけた河馬の親子は、我々といってもダンカンが見つけたのだが、直ぐに仲間に情報を流したが仲間の車や欧米の観光客が乗った車が集まった時には沼地にもぐってしまって、皆は見ることが出来なかった。そんな事は珍しくない。我々はライオンやジャガーといった猫科の動物を見られなかったが見たグループもいた。
猫科の動物は夜行性なので、日中はまず見られない。木の

枝か岩陰で寝ていた所だろうが、見た人たちは幸運に恵まれたのである。

（写真 74）河馬。通常は水中に居るので、陸上を歩いているのは珍しい。

アフリカ象の存在感は大きい。大きいので、遠くからでも判別できる。家族単位で歩いている。親子の 3 頭単位から、多いと 20 頭くらいの集団でいることもある。朝にキリマンジャロの麓の方向に食料を求めて歩き、夕方には反対方向にあるねぐらに戻ってくる。今回は着いた夕方と翌日の朝と夕方の 3 回のゲームドライブをしているので、アフリカ象を見る機会は多かった。

（写真 75）鳥に寄生虫をとってもらっている。

映像で見る様な、背中に数多くの小鳥を乗せて皮膚の寄生虫を取ってもらっている姿や小象をまんなかにして、両親がそれを守るようにして歩いている姿も見ている。遠くにいて、真っ直ぐこちらに向かっていると、数分車を停めて待っていると 10 メートルくらい先を足音高く通り過ぎていく。この迫力は動物園ではとても味わえない。
思わずカメラで連射をするが、こちらには眼もくれずに通過していく。

角の大きな鹿がいた。名前の解らない動物がいるが、ダンカンに名前を聞いても、現地の名前だからわからない。「はあ」とうなずくだけだ。鹿の仲間、牛の仲間、イノシシの仲間、鳥の仲間くらいしか識別出来ない。
鳥類はなかなか見られない。草原にいる冠鶴のつがいや沼地に群棲しているペリカンの様な大型鳥類は見かけるが、草むらに潜んでいたり、空中を飛んでいる小鳥はなかなか視認出来ない。

（写真 76）かんむり鶴。

「フラミンゴがいる」というダンカンの声に皆がその方向に目をこらすが、遠くにピンク色の線が一直線に引かれているだけしか視認出来ない。持参した双眼鏡で覗いてみて始めておそらくフラミンゴなのだろう。ピンク色の鳥の群れが見える。残念な

がら大きな沼地の奥にいるのでここまでしか判らなかった。

（写真 77,78）左、フラミンゴの群れ。　右、ペリカンのコロニー

ゲームドライブは早朝と夕方の 2 回行われ、野生動物の移動の時間帯に合わせている。野生動物はそれぞれ棲み分けしているから、朝と夕方で近くに見られる動物が違ってくる。我々は到着した夕方と翌日の早朝と夕方にゲームドライブを経験したが、ドライブするコースも違い、野生動物の種類や雰囲気も異なっていて面白い。

日中は殆ど見られないらしい。夜間にでも出かければ、猫科の動物が見られ、映像で見るようなドラマが見られるかもしれないが、一般的にはそれはなされていない。

ゲームドライブの間の食事は廻りにレストランがあるわけではないので、ロッジの食堂でしか摂れない。外国からの観光客相手のロッジだから、欧米風のバイキングになっている。ビールや酒類は輸入品で地酒はない。せっかくアフリカに来たのだから地元の料理をいろいろ食べてみたいのだが、本格的なものはない。ただ、「うがり」は置いてある。「うがり」はとうもろこしの粉をおゆで練ったもので、蕎麦かきの様なものだ。原料がとうもろこしだから、その物は味も風味もない。こちらの人にはこれが主食である。野菜や肉の煮込んだスパイスの効いた物と一緒に食べている。思ったよりおいしいが、毎食こういう食事だと飽きてしまう。食事のバラエテイは少ない。

食事のあとにステージになっているベランダに腰掛けてビールやコーヒーを飲んでいると、星明りにアフリカ象の通過していく大きな黒い影が見える。まるでヘミングウエーの世界にいる様だ。

～～～